

## 交差性教育学 (intersectional pedagogy) とはなにか

日時 2024年6月28日 (金) 13:00~14:30

場所 千里山キャンパス 尚文館 1階 マルチメディアAV大教室

講師 赤尾 勝己 (研究員、文学部教授)

交差性 (intersectionality) という概念は、1989年にアメリカの法学者でブラック・フェミニストのキンバリー・クレンショー (Kimberle Crenshaw) によって提起されました。クレンショーは、それまでのフェミニズム理論が、白人・女性を中心としたものであったことに対する異議申し立てをしました。コリンズとビルゲは、これを次のように定義づけています。

「インターセクショナルリティとは、交差する権力関係が、様々な社会にまたがる社会的関係や個人の日常経験にどのように影響を及ぼすのかについて検討する概念である。分析ツールとしてのインターセクショナルリティは、とりわけ人種、階級、ジェンダー、セクシュアリティ、ネイション、アビリティ、エスニシティ、そして年齢など数々のカテゴリーを、相互に関連し、形成しあっているものととらえる。インターセクショナルリティは、世界や人々、そして人間関係における複雑さを理解し、説明する方法である。(コリンズ&ビルゲ2021:16頁)」

つまり、それは批判理論の系譜において、一人ひとりの人間は、階級 (class)、性 (gender)、人種 (race)、民族 (ethnicity)、年齢 (age)、性的指向 (sexuality)、障がい (disability) などの社会的要因によって複合的に構成されている束であり、一人ひとりが社会的に微妙に異なる主体であることを、私たちに意識させたのです。また、各要因間の力関係の違いや、ある要因が他の要因を強めたり弱めたりするといった複雑な構造を有しています。

交差性概念は、その後20余年の間に、教育学の領域にも浸透してきました。とりわけ、パウロ・フレイレ、ベル・フックス、マイケル・アップル、ヘンリー・ジルーなどの批判的教育学 (critical pedagogy) の論者との関連性が色濃く出ています。私自身も大学院を出て教育学研究者になりたての頃、批判的教育学に魅力を感じていました。

本公開講座では、まだ日本において十分に展開されていない「交差性教育学」の輪郭について提示をしてみたいと思います。これに基づいて、どのような教育実践が構想されうるのか、また私が現在、専門としている生涯学習研究において、交差性に基づく生涯学習支援がどのようになされうるのかについて、その構想を提案してみたいと思います。

(参考文献: P.H.コリンズ、S.ビルゲ著、小原理乃訳、下地ローレンス吉孝監訳『インターセクショナルリティ』人文書院、2021年。)

\* \* \*

### ●聴講無料 (定員200名/先着順) <事前申込制>

人権問題研究室ホームページ トップページ (<https://www.kansai-u.ac.jp/hrs/>) にある「新着情報」内の本講座案内ページの申込フォームから事前を受講申込をしてください。定員になり次第、受付を終了します。

空席がある場合に限り、事前申込をされていなくても聴講は可能です (当日会場にて参加受付を行います)。ただし、なるべく事前申込を行ってください。

手話通訳が必要な場合は、6月6日(木)までに人権問題研究室へご連絡ください。

第117回 10月25日 (金) 13:00 「川上村における地域福祉政策と地域共生社会づくりの取組について」(仮題)

第118回 11月22日 (金) 13:00 「融和運動と部落女性」(仮題)

会場は、尚文館 1階 マルチメディアAV大教室 (予定)



主催 関西大学人権問題研究室

〒564-8680 吹田市山手町3-3-35 阪急千里線「関大前」駅下車

Tel 06-6368-1182 Fax 06-6368-0081

ホームページ <https://www.kansai-u.ac.jp/hrs/>